

青少年期から成人期への移行についての追跡的研究 (Japan Education Longitudinal Study: JELS) —JELS 第二期調査 Japan Education Longitudinal Study: Phase II Survey Report

耳塚 寛明*・中西 啓喜**・蟹江 教子***・垂見 裕子****・王 傑*****

Japan Education Longitudinal Study (JELS) は、2018年より地方中核市において、学力格差改善に資する知見を得ることを目的とした調査を開始している。具体的には、2018年度の小学校4年生と中学1年生の2つの学年を第一波調査の対象とし、当該学年が中学校を卒業するまで毎年追跡するパネル調査を実施している。その調査内容は、(1)児童・生徒質問紙調査、(2)同・学力調査、(3)担任教員質問紙調査、(4)保護者対象質問紙調査である。その上で、生徒の教育的不平等のプロセスを総合的に把握し、家庭的背景・文化的経済的環境と、教師のペダゴジーや指導実践との間の相互作用を社会的に明らかにし、格差改善に向けた方法を把握することを試みる。

キーワード：教育社会学、学力格差、パネル調査、JELS

1. 調査の概要

1.1. 調査の目的と実施状況

「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」(Japan Education Longitudinal Study: JELS) は2003年に開始され、関東エリア中都市および東北エリア小都市の小中高生および高校卒業者を対象とした追跡調査を継続的に行ってきた。そして、JELS第二期として、私たちは新たに地方中核市(A県B市)を調査エリアに選定し、学力格差縮小の処方箋を得ることを目的とした調査を開始している。地方中核市(人口約35万人)を調査エリアに加えることで、より地域的なバリエーションを含んだデータの構築が可能となることが見込まれる。

本調査は追跡的研究である。2018年度の小学校4年生(2009年生まれコーホート)と中学

1年生(2006年生まれコーホート)の2つの学年を第一波調査の対象とし、当該学年が中学校を卒業するまで毎年追跡するパネル調査を計画している。その調査内容は、(1)児童・生徒質問紙調査、(2)同・学力調査、(3)保護者対象質問紙調査を実施することであり、その上で、青少年の学力および進路形成過程を総合的に把握し、家庭的背景・文化的経済的環境と、教師のペダゴジーや指導実践との間の相互作用を社会的に明らかにし、学力格差縮小への処方箋を得ることを試みる。

これまでに実施した調査および今後に実施予定の調査は表1-1にまとめた。表中に○が記された箇所が実施済み調査である。B市教育委員会が毎年度実施する標準学力検査(Norm Referenced Test: NRT)の結果を提供してもらっている。なお、2019年度の保護者調査は滞りなく実施できた。2020年度の児童生徒調査はCovid-19の流行を踏まえて調査時期の調整を迫られたが、B市教育委員会からの多大な協力を受けながら実施することができた。

*青山学院大学

**桃山学院大学

***宇都宮共和大学

****武蔵大学

*****慶應義塾大学

また、保護者調査および児童生徒調査の回収状況は、表1－2にまとめている。保護者調査は、年収、学歴、シングルペアレントかどうかなど家族構成等のセンシティブな質問項目が多い調査票ではあったが、回収率がおよそ8割程度を維持することはできた。

1.2. 本稿の構成と分析に用いる変数

本稿で第2章より展開する分析は以下の4点である（括弧内は分析担当者）。

第2章：何が子どもの学力を決めるのか？
—SESと学習時間の影響力（中西啓喜）

第3章：一度獲得した学力はどのように変化するか？（蟹江教子）

第4章：家庭で、どのようなことをすると学力が上がるのか？（垂見裕子）

第5章：中学3年生の学歴希望と保護者の学歴期待（王傑）

以下に展開する分析に共通する変数として、学力と社会経済的背景（Socio-economic Status：SES）それぞれの変数の構成について

ここで説明しておく。

学力は、既述の通り、標準学力検査（NTR）のスコアをそのまま用いる。学力変数の基礎集計は表1－3にまとめた。

SES変数は、保護者調査における世帯年収と父母学歴が持つ情報を集約するために主成分分析を行った。その結果、分散の約50%が説明される主成分を抽出することができた。この変数は標準化されているため、平均値が0、標準偏差が1となる。また、分析に応じて、このSES変数を四分位で分割し、下位（Lowest SES）、中下位（Lower middle SES）、中上位（Upper middle SES）、上位（Highest SES）と称して用いる。（耳塚寛明）

表1－1. JELS第二期調査の実施状況

		2009年生まれコーホート				2006年生まれコーホート		
		学力データ	児童調査データ	保護者調査データ		学力データ	生徒調査データ	保護者調査データ
2018年度	小4	○	×	×	中1	○	×	×
2019年度	小5	○	×	○	中2	○	×	○
2020年度	小6	○	○	×	中3	×	○	×
2021年度	中1	調査中	調査中	調査中	—			
2022年度	中2	調査予定	調査予定	調査予定	—			
2023年度	中3	調査予定	調査予定	調査予定	—			

表1－2. 2021年11月現在のデータ回収状況

		対象学年	配布数	回収数	回収率
2019年度	保護者調査	小5	3269	2830	86.6%
		中2	2997	2391	79.8%
2020年度	児童生徒調査	小6	3269	3021	92.4%
		中3	3007	2644	87.9%

表 1－3．学力スコアの基礎集計

	小5					中2				
	N	Mean	S.D.	Min.	Max.	N	Mean	S.D.	Min.	Max.
国語偏差値	2530	52.5	9.0	26.0	73.0	2090	52.3	8.4	26.0	74.0
算数偏差値	2529	52.3	10.8	20.0	72.0	2092	51.9	10.1	29.0	77.0
社会偏差値	2529	51.4	11.0	15.0	72.0	2095	51.2	10.5	23.0	72.0
理科偏差値	2531	51.6	10.8	15.0	72.0	2093	50.5	11.0	15.0	72.0
英語偏差値			—			2091	52.5	10.9	15.0	74.0
全教科偏差値	2532	52.1	9.4	21.0	71.0	2096	51.7	9.1	26.0	72.0

2. 何が子どもの学力を決めるのか？

—SESと学習時間の影響力

第2章では、SESと学習時間に注目し、学力の規定要因分析を行う。まずは本節では、B市における学力とSESの関連の特徴について分析する。

学力とSESの関連はすでに多くの蓄積があり、出身家庭のSESが高い児童生徒ほど学力が高いことはよく知られており、この傾向はB市でも例外ではない⁽¹⁾。ここでは、全国学力・学習状況調査データと比較することで、B市での学力とSESの様相について把握する。

図2－1は、それぞれの学力スコアを従属

変数に設定し、SESを独立変数とした単回帰分析によって得られた標準化回帰係数をB市と全国データとで比較したものである⁽²⁾。この結果を見ると、B市の方がやや学力に対するSESの影響が小さいことが示唆される。とりわけ、中学数学においては小さくない差がみられる。

次に、学力に対する学習時間（普段の平日の学習時間）の影響を確認しよう。図2－2は、学習時間別に見た学力スコアの平均値である。ここからわかる通り、どの教科であっても学習時間が多いほど学力スコアが高いことがわかる。

これらの結果を踏まえ、学力の全教科偏差値を従属変数とし、SES、学習時間、性別（男子

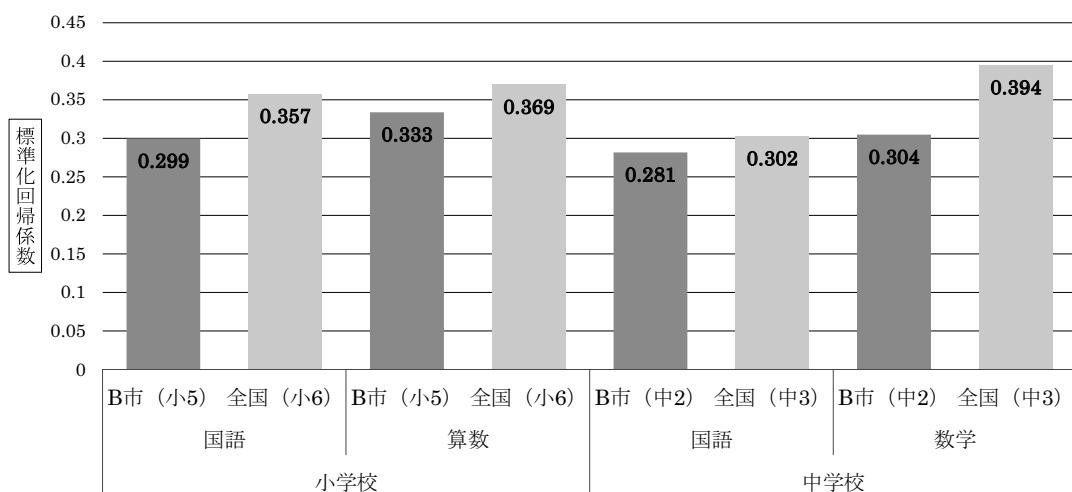


図2－1．学力とSESの標準化回帰係数のB市と全国での比較

注：全国データの出所は、山田（2021、pp.13-16）である。

= 1) を独立変数に投入した重回帰分析を行ったのが表 2 - 1 である。この分析結果より把握できることは以下の通りである。

第一に、SESが高い児童の方が学力が高いということである。具体的な係数を読めば、SES 下位層を基準にすると、上位層の児童は約8.3ポイントも高いことになる。

第二に、男子ダミーがマイナスで有意なことから、女子の方が高い学力スコアなことがわかる。係数を見ると、男子と女子では約1.8ポイントの差がある。

第三に、学習時間の多い児童の方が高い学力スコアを獲得している。全く勉強しない児童と比べると、約8.5ポイント学力が高い。ただし、標準化回帰係数であるベータを見ると、上位層のベータが0.385と最も高く、やはりSESの影響が非常に大きいことがわかる。

第四に、学習時間の効果が統計的に観測され

るのは、1 時間以上からだということである。つまり、30分程度の学習では学力は向上しないことが示唆されよう。

最後に、SES別に学習時間の効果の違いを確認するために、分析対象をSES上位と下位のみに限定したものが表 2 - 2 である。これを見ると、SES上位では、学習時間が長いほど係数が大きく、表 2 - 1 (全体での分析) と比較しても係数が大きいことがわかる。一方で、SES下位では学習時間の効果が統計的にほとんど見られない。つまり、学習が学力スコアへ変換されるのは高いSESの児童に限られるということである⁽³⁾。

このような結果を踏まえ、以下の章では、「一度獲得した学力はどのように変化するのか?」や「家庭で、どのようなことをすると学力が上がるのか?」といったテーマの分析を展開していく。(中西啓喜)

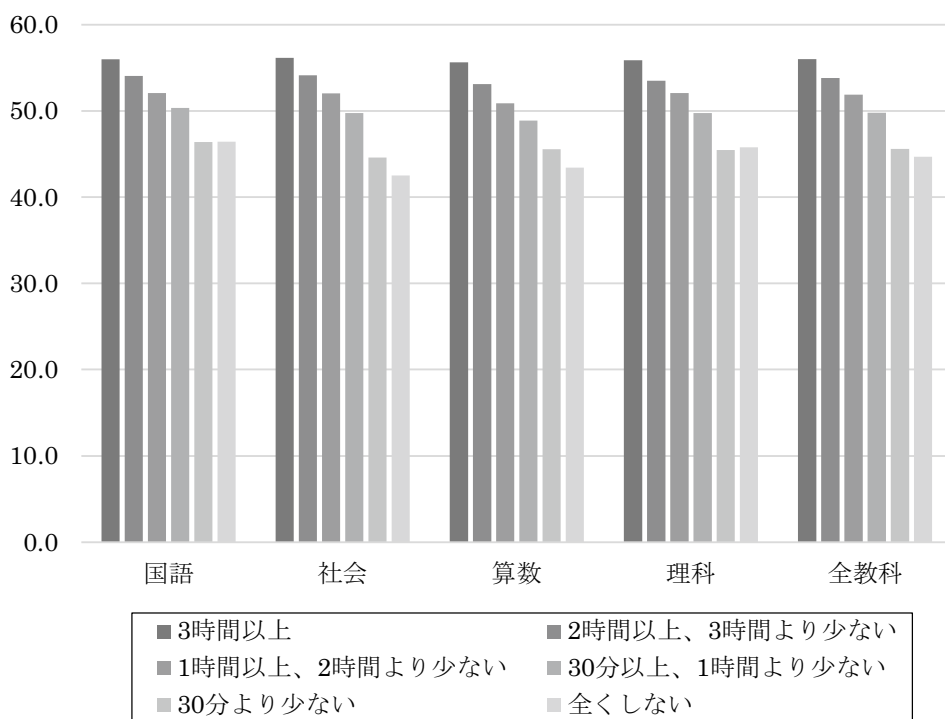


図 2 - 2. 学習時間別に見た学力スコアの平均値 (小6)

表 2－1. 全教科偏差値スコアの重回帰分析（小 6）

	B	ベータ	有意確率
性別（基準：女子）			
男子	-1.795	-0.097	0.000 ***
SES（基準：下位層）			
中下位層	2.572	0.122	0.000 ***
中上位層	4.973	0.232	0.000 ***
上位層	8.303	0.385	0.000 ***
平日の学習時間（基準：全くしない）			
30分より少ない	1.448	0.038	0.455
30分以上、1 時間より少ない	3.711	0.179	0.040 *
1 時間以上、2 時間より少ない	5.249	0.277	0.004 **
2 時間以上、3 時間より少ない	7.088	0.262	0.000 ***
3 時間以上	8.574	0.261	0.000 ***
定数	44.279		0.000 ***
調整済み R2 乗	0.169		

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表 2－2. SES下位と上位における全教科偏差値スコアの重回帰分析（小 6）

	SES下位			SES上位		
	B	ベータ	有意確率	B	ベータ	有意確率
性別（基準：女子）						
男子	-1.794	-0.096	0.040 *	-2.386	-0.151	0.001 **
平日の学習時間（基準：全くしない）						
30分より少ない	-0.090	-0.003	0.978	9.350	0.223	0.027 *
30分以上、1 時間より少ない	1.136	0.056	0.715	10.436	0.580	0.007 **
1 時間以上、2 時間より少ない	4.596	0.240	0.137	10.434	0.647	0.007 **
2 時間以上、3 時間より少ない	6.416	0.222	0.049 *	13.134	0.611	0.001 **
3 時間以上	5.101	0.137	0.138	15.288	0.607	0.000 ***
定数	45.797		0.000 ***	46.886		0.000 ***
調整済み R2 乗	0.060			0.083		

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

3. 一度獲得した学力はどのように変化するか？

本章では小学 4 年次と小学 6 年次の学力（偏差値スコア）の関連について明らかにし、2 年間における変化の状況とその要因について SES と平均の学習時間という 2 つの点から検討する。

3. 1. 学力は変化するか？

小学 4 年次と小学 6 年次の学力の関連を示

したものが図 3－1～図 3－5 である。横軸（x 軸）を 4 年次の学力、縦軸（y 軸）を 6 年次の学力として散布図を描くと、どの科目においても高い相関が認められ、一度獲得した学力はその後にも維持されていたことがわかる。

表 3－1 は教科ごとに相関係数を示したものである。相関が最も高かったのは国語（ $r = .753$ ）であり、最も低かったのは理科（ $r = .668$ ）であった。教科により相関に差は認められたが、いずれも高い相関を示していた。国語は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」

から構成されており、すべての教科の基本である。国語を適切に表現し正確に理解することで思考力は養われ、国語力はどの教科にも必要で

ある。そのため4教科の中で最も相関が高かったと考えられる。

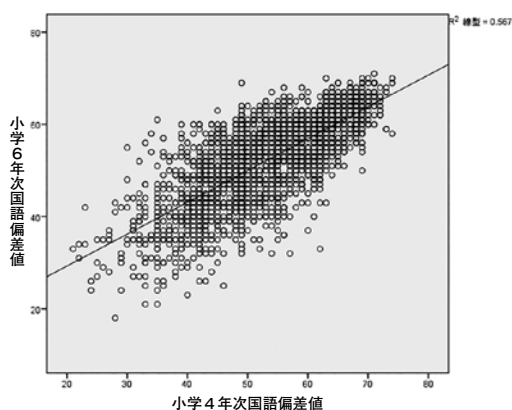


図3-1. 国語

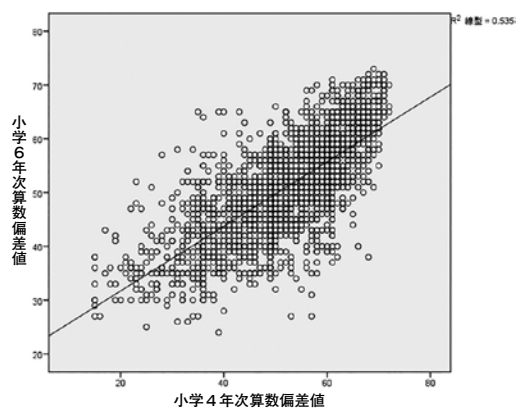


図3-2. 算数

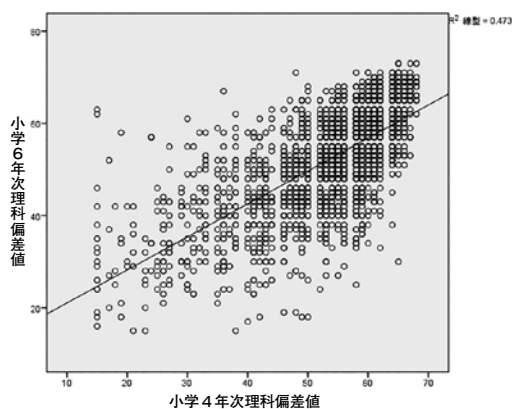


図3-3. 理科

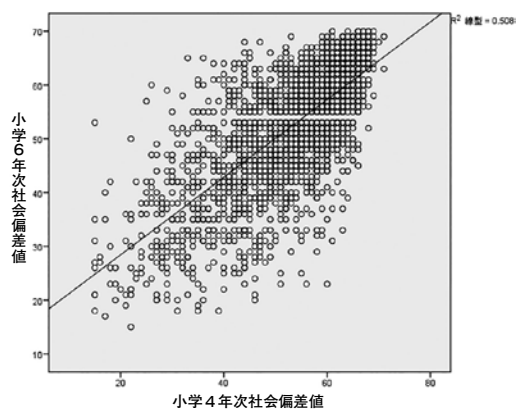


図3-4. 社会

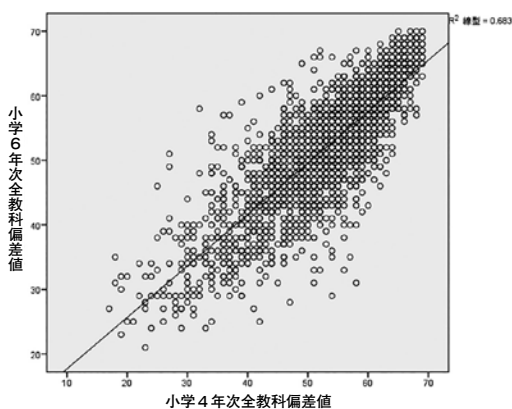


図3-5. 全教科

表3-1. 小学4年次と小学6年次の教科別の相関係数

教科	相関係数
国語	.753 ***
算数	.732 ***
理科	.688 ***
社会	.713 ***
全教科	.827 ***

*** $p < .001$

3.2. 学力が変化した児童

次に、個人内における学力の変化の状況について概観する。

図3-6は小学4年次と6年次の学力（全教科偏差値）の差である。9割以上の児童が変化しており、最も低下した児童は-27、最も上昇した児童は+26であった。変化の平均は-1.3、中央値は-2であり、小学4年次と比較すると全体的に低下していた。

学力の測定には誤差が含まれるため、-8以上低下した群を「大きく低下」、-7から-3を「やや低下」、-2から2を「変化なし」、3から7の上昇を「やや上昇」、8以上を「大きく上昇」と5群に分類した。37.2%は「変化

なし」であったが、「大きく低下」「やや低下」を合わせると40.3%となった。一方、「大きく上昇」は6.3%、「やや上昇」は16.1%であり、あわせると22.4%となった。偏差値という相対化された学力では、低下させることは簡単であるが、上昇させることは容易ではないことがわかる。

学力の変化とSES、平日の学習時間との関連を示したものが図3-8、図3-9である。SESが低くなるほど「大きく低下」あるいは「やや低下」した児童の割合が増加していた。上昇についてはSESが高いほど増加する傾向はあるが、低下ほど顕著ではなかった。

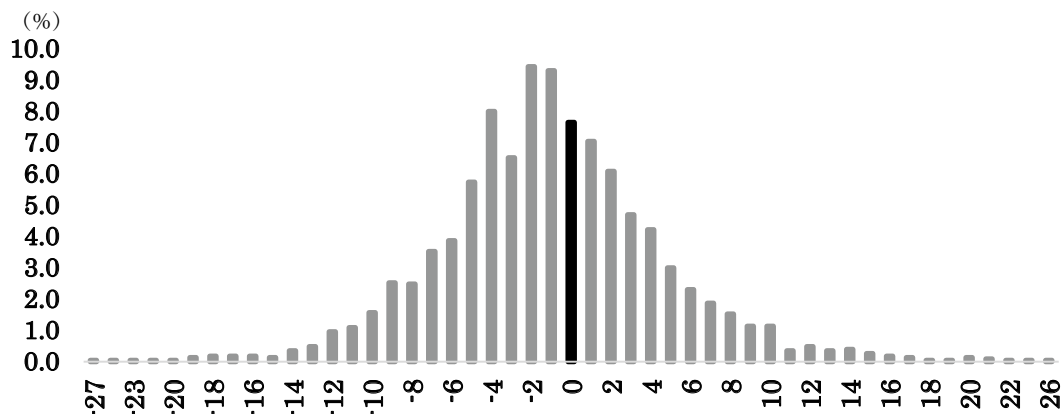


図3-6. 小学4年次と小学6年次の学力（全教科偏差値スコア）の変化

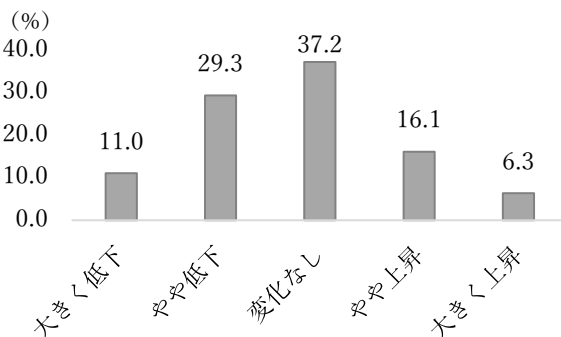


図3-7. 学力（全教科偏差値スコア）の変化状況

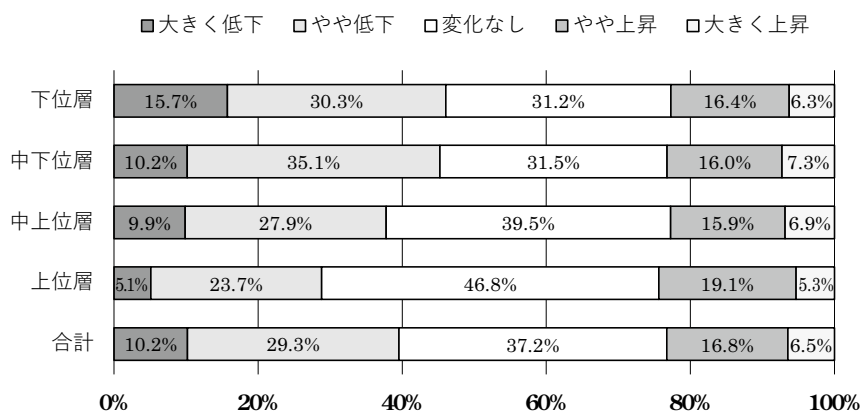


図3-8. SES別にみた学力（全教科偏差値スコア）の変化

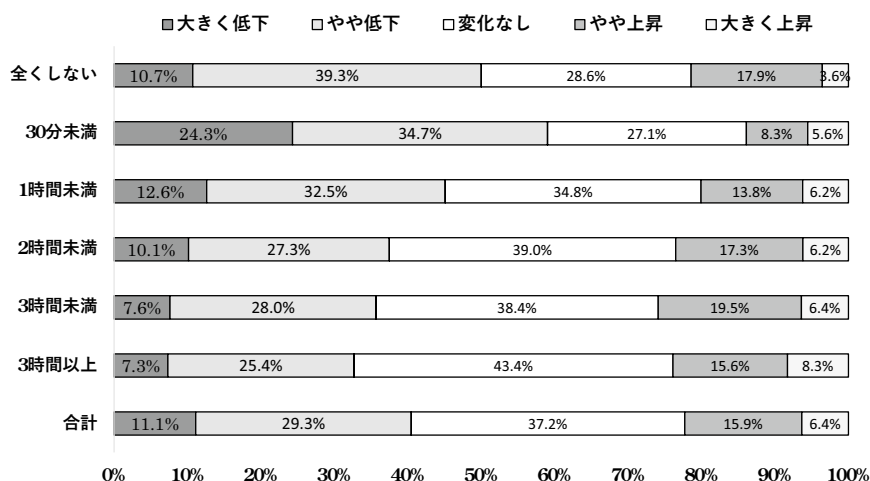


図3-9. 平日の学習時間別にみた学力（全教科偏差値スコア）の変化

図3-9は平日の学習時間別にみたものである。平日の学習時間が長いほど「大きく低下」「やや低下」は減少していた。平日の学習時間が長くなるほど「やや上昇」「大きく上昇」した児童の割合は増加する傾向が認められた。しかし、「全くしない」という児童の中にも「やや上昇」(17.9%)、「大きく上昇」(3.6%)していたケースがあった。一方、「3時間以上」にもかかわらず「大きく低下」が7.3%、「やや低下」が25.4%おり、時間という量的側面だけではなく学習方法や内容など質的側面についても考慮

する必要がある。

小学6年次の学力を規定する要因について、小学4年次の学力を含めて検討したものが表3-2である。モデル1では性別と4年次の学力を投入した。重回帰分析の結果、4年次の学力の影響力は大きく6年次の学力の67%を説明していた。モデル2でSESの影響力を確認したところ、下位層と比較して、中下位層、中上位層、上位層の学力は、いずれも有意に高かった。小学4年次の学力そのものがSESの影響を受けているが、その影響は小学6年次

においても有意であった。モデル 3 で平日の学習時間を投入すると、30分未満（「全くしていない」も30分未満に含めた）と比較していずれも有意に学力は高いという結果を示した。

小学 6 年次の学力の説明力は SES で 1.6%、平日の学習時間で 1.2% であり、小学 4 年次の学力（67%）と比較すると微々たるものであった。小学 4 年次の学力から小学 6 年次の学力のかなりの部分を予測することができ、一度獲得した学力は容易に低下する傾向はあるが、相関は高いといえる⁽⁴⁾。

3-3. 結果とまとめ

本章では小学 4 年次と小学 6 年次の学力の関連について明らかにし、2 年間における変化の状況とその要因について SES と学習時間という 2 点から検討した。得られた知見は以下のとおりである。

- ①小学 4 年次の学力と 6 年次の学力は相関が高く、4 教科の中では国語が最も高かった。
- ②小学 4 年次の学力を小学 6 年次も維持できた児童は 4 割弱（37.2%）であり、上昇させた児童は 2 割（22.4%）、4 割（40.3%）の児童が低下させていた。小学校高学年において

学力を上昇させることは容易ではなかった。

- ③小学 4 年次の学力で小学 6 年次の学力の 67% は説明できた。SES や学習時間も学力の上昇に関連していたが、小 4 次の学力と比較すると説明力は小さい。
- ④学力が上昇した児童の割合は SES によって大きな差は認められなかった。しかし、学力の低下については SES が低いほど「大きく低下」「やや低下」している児童が多く家庭環境の影響が大きいたことが明らかになった。
- ⑤平日の学習時間が長いほど、学力が低下している児童の割合が少ない傾向にあった。

学力は毎日の学習の積み重ねによって形成される部分が大きく、小学校高学年になって上昇する児童もいたが、その割合は決して多くはない。学力を低下させる児童の方が多く、その中には家庭環境に問題を抱えている児童が多く含まれていた。家庭に起因する不利益を学校教育でどのように支援するか、重要な課題である。（蟹江教子）

表 3-2. 小学 6 年次の学力（全教科偏差値スコア）を規定する要因

	モデル 1		モデル 2		モデル 3	
	B	ベータ	B	ベータ	B	ベータ
性別（基準：女子）						
男子	-.541	-.029 *	-.703	-.038 **	-.434	-.024 +
4 年次の学力（全教科偏差値）	.787	.818 ***	.751	.781 ***	.739	.769 ***
SES（基準：下位層）						
中下位層			1.209	.058 ***	1.123	.054 **
中上位層			1.946	.092 ***	1.643	.078 ***
上位層			3.394	.158 ***	3.100	.144 ***
平日の学習時間（基準：30分未満）						
30分以上 1 時間未満					1.681	.083 **
1 時間以上 2 時間未満					2.715	.145 ***
2 時間以上 3 時間未満					3.762	.142 ***
3 時間以上					4.063	.126 ***
定数	10.71	***	11.04	***	9.227	***
調整済み R ² 乗	.673		.689		.701	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4. 家庭における親の関与と子どもの学力の関連

本章では、親がどのようなことをしている家庭ほど、子どもの学力が高いのかという問題意識から、親の関与と子どもの学力について検討する。また、家庭背景（SES）が高い程、家庭で様々な教育的・文化的な活動が行われる（Lareau, 2003）ことを踏まえて、SESとの関連も見えていく。親の関与・学力・SESいずれも、子どもが小5時点（2019年度調査）のデータである。本調査はパネルデータであるが、現時点では保護者調査が一時点のみのため、本章ではパネル分析は行えない。

4.1. 親の関与の度数分布

家庭における親の関与には様々な営みが含まれる。本調査では、「子どもに朝ごはんを取らせている」など生活習慣に関する項目、「こどもを博物館や美術館に連れて行く」など家庭に

もを博物館や美術館に連れていく」など家庭における文化的活動（文化資本）に関する項目、「その日にあった出来事について、子どもと話す」など子どもとの繋がり（社会関係資本）に関する項目が含まれている。図4-1は、小5の保護者におけるそれぞれの関与（活動）の頻度を示す。どのような関与が一般的に行われ、どのような関与が希少なのか、確認してみよう。

図4-1から、質問項目により分布が大きく異なることが確認できる。「子どもに朝ごはんを取らせている」、「子どもが放課後どこにいるか把握している」や「その日にあった出来事について、子どもと話す」は大部分の親が行っている一方、「子どもを図書館に連れて行く」や「子どもを博物館や美術館に連れて行く」は行っていない親が多いことが確認できる。「子どもの就寝時間を決めている」や「子どもに勉強を教えることがある」は、その中間程度と言

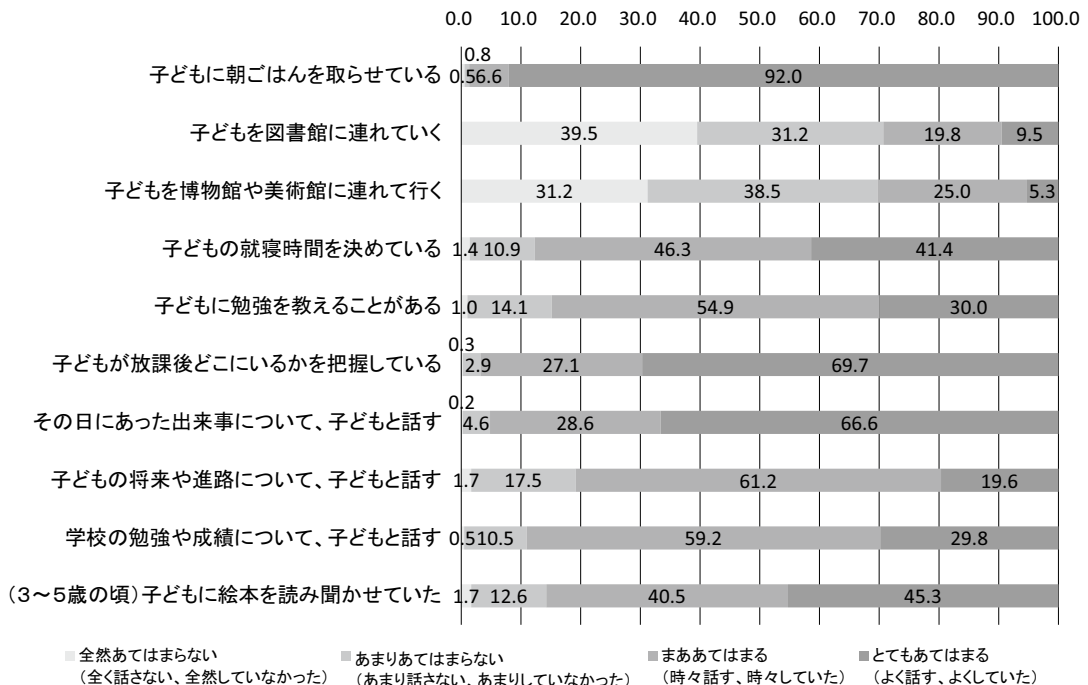


図4-1. 親の関与の度数分布

える。

4.2. 家庭の社会的経済的地位（SES）と親の関与の関連

これらの親の関与は、社会的経済的地位が恵まれた家庭ほど積極的に行っていることも考えられるため、ここでSESとの関連を確認する。SESは家庭の所得、父親学歴（教育年数）、母親学歴（教育年数）、それぞれを標準化し、3つの項目の平均値を算出したものである。図表4-2は、SESを4つのグループに分け、家庭環境が最も恵まれたHighest SESグループでそれぞれの活動に対して「とてもあてはまる」と答えた割合と、家庭環境が最も厳しいLowest SESグループでそれぞれの活動に対して「とてもあてはまる」と答えた割合を示している。

図4-2から、どの活動もSESにより大きく異なることが確認できる。例えば、「子ども

に朝ごはんを取らせている」に対して92%が「とてもあてはまる」と答えていたことを図4-1で確認したが、Lowest SESのグループではその割合は87.5%に留まり、Highest SESのグループでは95.6%と更に高い。なお図4-2では「子どもを博物館や美術館に連れて行く」はSESによる差が小さいように見えるが、「全然あてはまらない」と答えた割合で比較すると、Lowest SESでは40.3%、Highest SESでは21.5%と大きな差が見られたため、SESとの関連が低いわけではない。つまり、SESが高い親程、家庭で子どもの生活習慣を律し、文化的活動を行い、会話を通して子どもに規範を与えている傾向が確認できる。特に「子どもを図書館に連れて行く」と「子どもに絵本を読み聞かせていた」でLowest SESとHighest SESの差が顕著である。

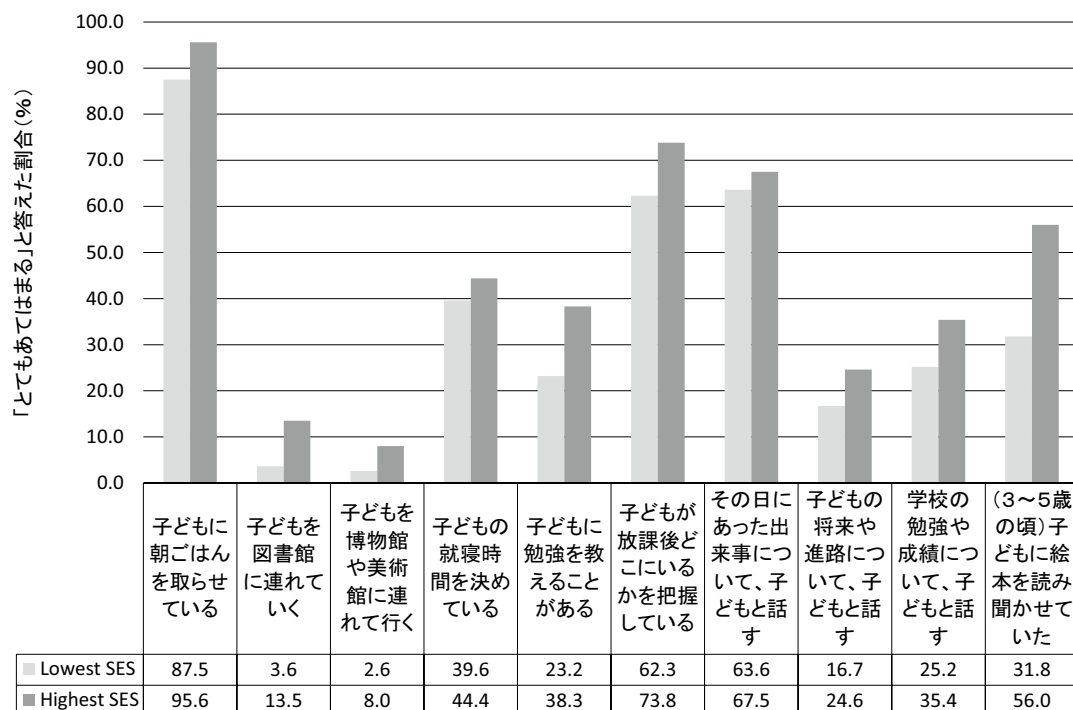


図4-2. SESと親の関与の関連

4.3. 親の関与と子どもの学力の関連

これらの親の関与と子どもの学力の二つの変数の関連を確認してみよう。学力は小5時点の算数学力（偏差値）を用いる。図4-3は、それぞれの親の関与の分布ごとに（例えば、「子どもに朝ごはんを取らせている」に「全然あてはまらない」と答えたグループの）子どもの学力の平均値を示している。

図4-3から、多くの活動で、親の関与が高いほど子どもの学力が高い傾向が見られる。ただし、「子どもに朝ごはんを取らせている」「子どもに勉強を教えることがある」「その日にあった出来事について、子どもと話す」「学校の勉強や成績について、子どもと話す」では、必ずしも子どもの学力と直線的な正の関連は見られない。ただし、グループによってはケース数が非常に少ないこと（例えば「子どもに朝ごはんを取らせている」に「全然あてはまらない」と答えたケースは14に留まる）に留意が必要で

ある。

4.4. SESと親の関与と子どもの学力の関連

最後に、これらの親の関与は、SESの影響力を取り除いたとしても、学力と関連があるのかを確認する。左の棒は回帰分析に親の関与のみを入れた場合、右の棒は回帰分析に親の関与とSESを入れた場合の、親の関与の標準化係数を現わしている。

図4-3から、2つのことが言える。第一に、どの質問項目もSESを統制すると学力との関連が小さくなるが、それでも学力と有意な関連が見られる。つまり、これらの親の関与がSESに規定されること、またSESが学力に影響を及ぼすことを考慮したとしても、これらの活動は独自に（SESとは別に）学力に影響を及ぼすということである。例外は「子どもに勉強を教えることがある」であり、統制後は学力と有意な関連が見られない。理由としては、子ども

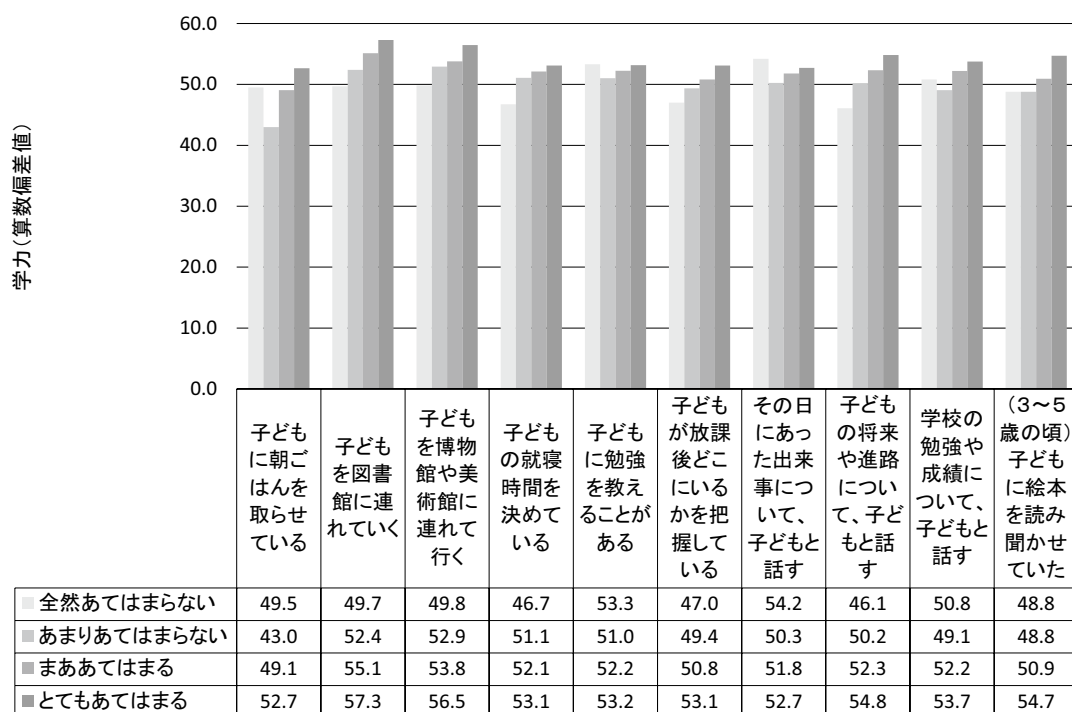


図4-3. 親の関与と子どもの学力の関連

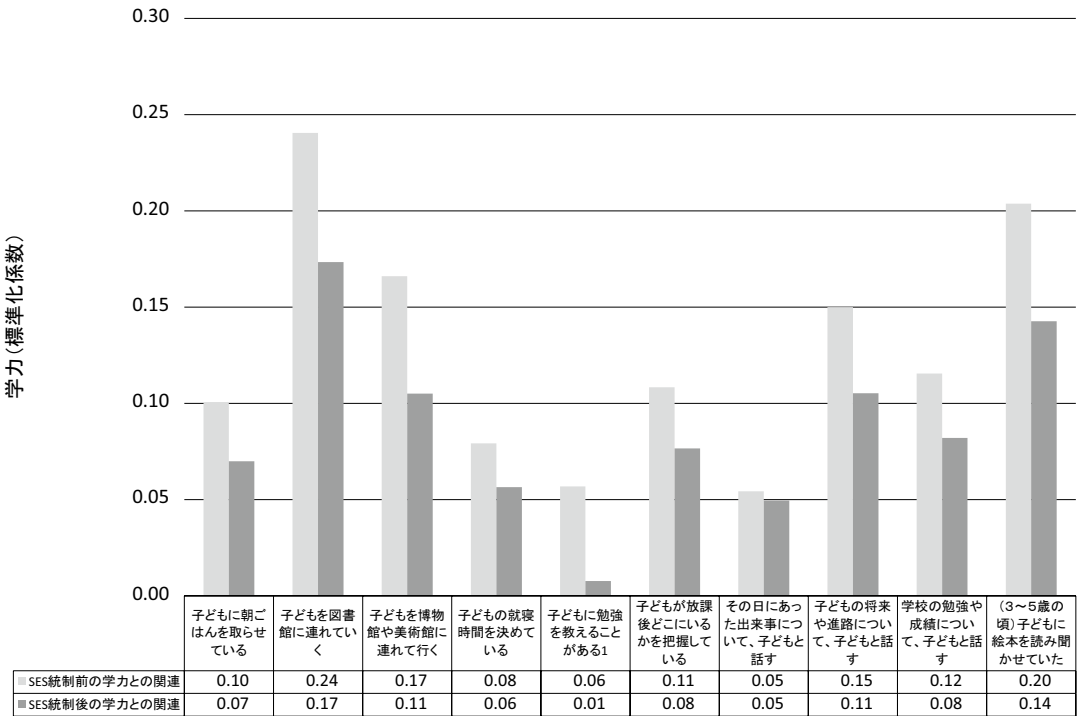


図4－4. 親の関与・SES・子どもの学力の関連

が低学力層、親が勉強を教えるという逆の関連が混在していることや、勉強を教えるか否かよりもどのように教えているかが学力に影響を及ぼすことなどが考えられる。

第二に、SESの影響を統制した上で、学力との関連が最も強い親の関与は、「図書館に連れて行く」と「子どもに絵本を読み聞かせていた」である。この傾向は、全国学力・学習状況調査でも見られている。また本調査には含まれていないが、全国学力・学習状況調査では「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」「子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている」も学力と強い関連が示されている（垂見2021）。

以上の結果から、子どもの学力向上の施策として家庭での読書活動や活字を尊ぶ規範を推進することが有効であることが示唆される。ただしSESが高い親程、家庭で子どもの生活習慣を律し、文化的活動を行い、会話を通して子ど

もに学校や勉強に親和的な規範を与えている傾向も確認されたため、特にSESが低い家庭には、親にこれらの活動の必要性和効果を分かり易く示すとともに、家庭外場でそれらを子どもに補うことも重要であると考ええる。（垂見裕子）

5. 中学3年生の学歴希望と保護者の学歴期待

質問紙調査に協力してくれた中学3年生は、義務教育の終了が残すところ数か月で、高校入試を控え、将来の進路についていろいろと考える時期にある。

これまでの研究では、中学3年生の学歴希望（「将来、どの学校まで進みたいか」に対する学校段階の回答、教育アスピレーションとする場合もある）は保護者の学歴期待（「お子さんに、どのくらいまで勉強してほしいか」に対する学校段階の回答）と強い相関関係にある

が、ずれる場合もある（王 2018、2019）。また、本人の学歴希望に対して学力が最も規定力が大きく、家庭の社会経済的背景や通塾の影響も受けることは、先行研究から明らかにされている（耳塚 2006、中島 2006、王 2014）。

本章では、中学3年生本人の学歴希望と保護者の学歴期待の基本分布、SES別にみた本人の学歴希望と保護者の学歴期待の傾向を示し、偏差値最上位群と最下位群それぞれのSES別学歴希望と学歴期待を比較したうえ、親子ペアの回答から本人の学歴希望と保護者の学歴期待の重なる度合いを考察し、本人の学歴希望の規定要因を推定する。

5.1. 本人の学歴希望と保護者の学歴期待の基本分布、その階層差および偏差値を統制した場合の階層差

表5-1は、生徒本人が回答した学歴希望と保護者が回答した対象者に対する学歴期待のそれぞれの分布である。本人の回答と比べ、保護者の「その他」と「無回答」の割合は合計6%大きい。全体として二者の回答の分布は近いといえよう。高校卒業後、進学を志向する親子は8割前後で、そのうち「普通の大学」の割合が最も大きく、4割強である。

次に、SES別に本人の学歴希望と保護者の学歴期待の分布を見てみる。図5-1の上が示すように、下位層の子どもの「高等学校」と「専門学校・各種学校」の希望率が相対的に大きく、「普通の大学」と「難関の大学」の希望率が相対的に小さい。最下位層の進学を希望しない割合（24.9%）と最上位層の進学を希望しない割合（3.9%）の間には、20%以上の開きがある。上の階層ほど、子の「普通の大学」と「難関の

大学」の希望率が高い。最上位層の子どもが希望した「普通の大学」と「難関の大学」と「大学院」の合計は全体の8割を上回り、最下位層の同比率の1.8倍である。難関大学への進学希望について、とりわけ最上位層の希望率が高い。

SES別の保護者の学歴期待の分布にも、はっきりした階層差が示される（図5-1の下）。下位層の保護者ほど、「高等学校」と「専門学校・各種学校」を期待する割合が相対的に大きい。言い換えると、下位層ほど、自分の子どもが高校卒業後、就学期間の長い4年制大学への進学を期待しない割合が大きい。上位層ほど、4年制大学、難関大学への進学を期待する割合が大きい。最上位層の保護者の「普通の大学」と「難関の大学」と「大学院」への期待率も合計で全体の8割を上回る。

さらに、偏差値を統制してSESと本人の学歴希望との関係を見てみた。図5-2は偏差値最上位群と最下位群の結果のみを示す。偏差値最上位群の場合、SES別の学歴希望の分布に差が比較的小さく、どの層の生徒も高校卒業後進学を希望する割合が9割を上回り、最上位層の難関大学への希望率が目立って高い。それに対して、偏差値最下位群では、SES別の学歴希望の分布の違いが一目瞭然で、下位層の子どもほど進学を希望しない割合が大きく、専門学校・各種学校の希望率も相対的に高く、4年制大学への希望率が低い。また、偏差値は最下位群であっても、最上位層の高卒後の進学希望率は8割を上回る。

偏差値最上位群と最下位群のそれぞれのSES別学歴期待の分布は、概ね図5-2と同じ傾向を見せる（図表略）。偏差値最上位群では、

表5-1. 生徒の学歴希望と保護者の学歴期待の基本分布（%）

	中学校 まで	高等学校	専門学校・ 各種学校	短大・ 高専	普通の 大学	難関の 大学	大学院	その他	無回答	合計
本人の学歴希望	3	16.2	20.0	4.9	44.9	9.8	1.9	.9	1.1	100.0
保護者の学歴期待	4	13.0	19.2	8.5	42.2	7.7	1.0	3.8	4.2	100.0

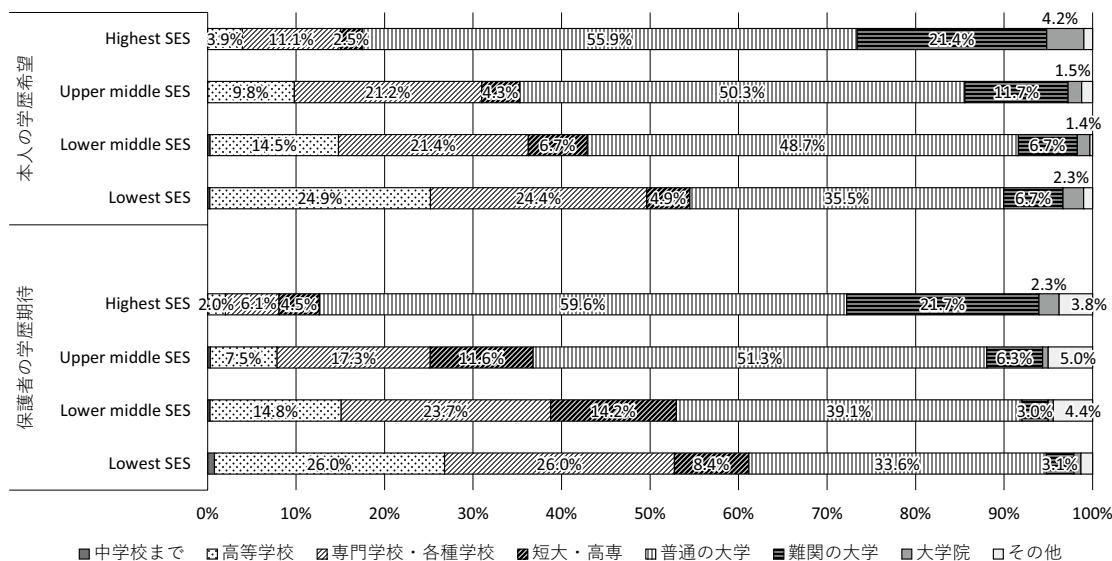
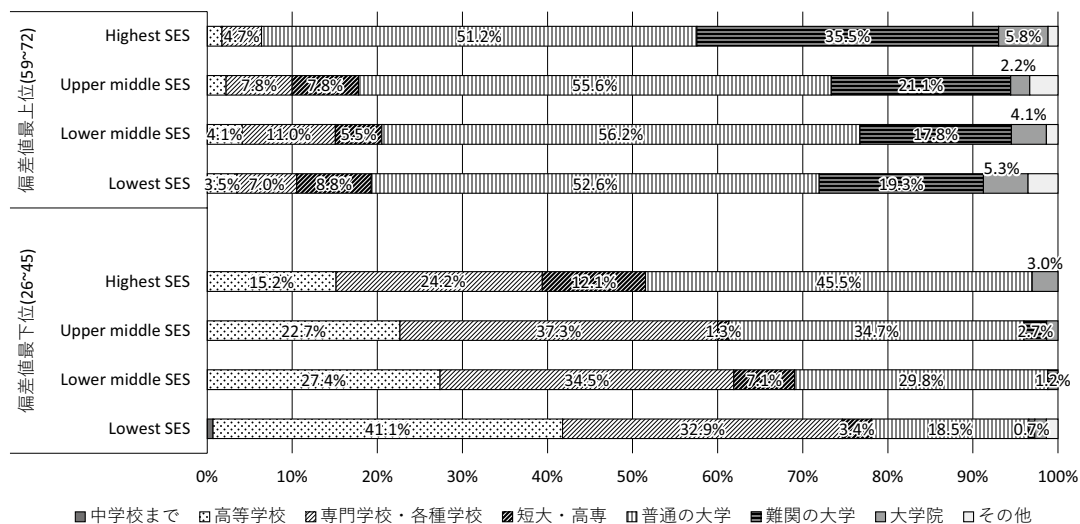


図5-1. SES別にみた本人の学歴希望と保護者の学歴期待



注：2019年の5教科平均偏差値を4分位にした。偏差値の区間はそれぞれ最上位59～72、中の上53～58、中の下46～52、最下位26～45である。

図5-2. 偏差値最上位群と最下位群のSES別学歴希望

全体として高校卒業後進学を期待する割合が大きく、SES最上位層の4年制大学、難関大学への期待率がとりわけ高い。偏差値最下位群の場合、下位層ほど高校卒業後の進学を期待しない割合が大きい。

つまり、学力が高いと生徒の学歴希望も保護者の学歴期待もそれほどSESに左右されないが、学力が低い場合、二者ともSESに強く影響される可能性がある。

5.2. 親子ペアデータからみた本人の学歴希望と保護者の学歴期待の重なる度合い

続きは親子ペアのデータを用いて、本人の学歴希望と保護者の学歴期待の重なる度合いを見してみる。保護者と子の両方が質問紙調査に回答した家庭は1837ケースある。学歴希望、学歴期待の設問を回答しなかったケースと「その他」を選択したケースを除くと、1749ケースが残った。明確な選択をした1749組の親子の回答を二重クロスで集計した（表5-2）。網掛けの部分は親子が完全に同じ選択肢にした割合であり、計823組あり全体の47.1%を占める。そのうち、最も比率が高いのは「普通の大学」の27.8%である。保護者の学歴期待より本人の学歴希望が高いのは491ケースで、全体の28.1%を占める。また、本人の学歴希望より保護者の学歴期待が高いのは435ケースで、全体の24.8%を占める。表5-1では、保護者の回答と本人の回答は非常に近い分布を見せたが、それはあくまでも分布上の類似であり、実際、親子の回答が完全に一致する割合は5割弱にとどまる。

表5-2の結果をさらにSESを統制して見てみた。表5-3は最下位層と最上位層の結果である。完全に一致する比率は、最下位層では47.6%、最上位層では49.7%である。最下位層の完全一致は「普通の大学」(20.0%)、「高等学校」(14.2%)、「専門学校・各種学校」(11.0%)に集中し、低学歴志向における一致する割合が比較的大きい。一方、最上位層の完全一致は

「普通の大学」(37.5%)、「難関の大学」(8.2%)に集中し、高学歴志向における一致する割合が圧倒的に大きい。

5.3. 本人の学歴希望の規定要因分析

重回帰分析モデルを用いて、生徒の学歴希望の規定要因を推定してみた（表5-4）。モデル1では、統制した3つの独立変数のうち、保護者の学歴期待の標準化係数ベータの値（即ち、規定力）が最も大きく、つぎに大きいのはSESである。さらに偏差値をコントロールしたモデル2では、4つの独立変数はいずれも統計的に顕著に有意であり、規定力の大きさは、偏差値>保護者の学歴期待>SES>性別の順となる。塾での1週間の学習時間を独立変数として追加したモデル3をみると、5つの変数はいずれも統計的に顕著に有意であり、規定力の順は、偏差値>保護者の学歴期待>塾での学習時間>SES>性別となる。

保護者の学歴期待とSESの規定力は、偏差値を統制したことで大きく縮小したが、さらに塾での学習時間を統制するとわずかな縮小にとどまった。また、偏差値の規定力は塾での学習時間を統制してもほとんど変化していない。

5.4. 結果のまとめ

中学3年生の8割以上が高校卒業後進学したいと回答している。保護者も8割弱が高校卒業後進学してほしい。それぞれの4割強が

表5-2. 親子ペアデータからみた本人の学歴希望と保護者の学歴期待の一致率（N=1749）

		本人の学歴希望						合計
		高等学校	専門学校・ 各種学校	短大・高専	普通の大学	難関の大学	大学院	
親の学歴期待	高等学校	6.5%	2.9%	.7%	3.4%	.2%	.2%	13.8%
	専門学校・ 各種学校	4.4%	8.3%	1.1%	6.4%	.6%	.1%	20.9%
	短大・高専	1.0%	2.6%	1.3%	3.8%	.5%	.1%	9.4%
	普通の大学	3.1%	6.1%	1.7%	27.8%	6.6%	1.0%	46.3%
	難関の大学	.2%	.1%	.2%	4.8%	2.7%	.5%	8.5%
	大学院		.1%	.1%	.2%	.3%	.5%	1.1%
合計		15.2%	20.2%	5.1%	46.4%	10.9%	2.3%	100.0%

表5－3. 親子ペアデータからみたSES最下位層と最上位層の親子回答の一致率

			本人の学歴希望						合計
			高等学校	専門学校・各種学校	短大・高専	普通の大学	難関の大学	大学院	
Lowest SES	親の学歴期待	高等学校	14.2%	4.7%	1.6%	4.1%	.5%	.5%	25.8%
		専門学校・各種学校	6.3%	11.0%	1.1%	6.8%	1.1%	.3%	26.6%
		短大・高専	1.9%	2.2%	.8%	3.6%		.3%	8.8%
		普通の大学	3.3%	6.0%	1.1%	20.0%	3.6%	.8%	34.8%
		難関の大学				2.2%	1.1%		3.3%
		大学院					.3%	.5%	.8%
	合計		25.8%	23.8%	4.7%	36.7%	6.6%	2.5%	100.0%
Highest SES	親の学歴期待	高等学校	.5%	.5%		.8%	.3%		2.1%
		専門学校・各種学校	.5%	1.9%	.3%	3.5%	.3%		6.4%
		短大・高専		1.3%	.3%	2.7%	.3%	.3%	4.8%
		普通の大学	2.1%	6.9%	1.9%	37.5%	12.0%	1.6%	62.0%
		難関の大学	.5%	.5%		11.7%	8.2%	1.3%	22.3%
		大学院				.5%	.5%	1.3%	2.4%
	合計		3.7%	11.2%	2.4%	56.6%	21.5%	4.5%	100.0%

表5－4 生徒本人の学歴希望の規定要因（n=1331）

モデル		標準化されていない係数		標準化係数 ベータ	t	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差				許容度	VIF
1	(定数)	8.883	.403		22.051	.000		
	性別	.121	.073	.040	1.650	.099	.987	1.013
	SES	.245	.039	.162	6.215	.000	.844	1.185
	保護者の学歴期待	.408	.027	.396	15.104	.000	.836	1.197
2	(定数)	8.062	.395		20.410	.000		
	性別	.201	.071	.066	2.835	.005	.976	1.025
	SES	.159	.039	.105	4.113	.000	.807	1.239
	保護者の学歴期待	.290	.028	.281	10.241	.000	.704	1.421
	偏差値	.049	.005	.283	10.518	.000	.731	1.368
3	(定数)	8.117	.393		20.664	.000		
	性別	.214	.070	.070	3.037	.002	.974	1.027
	SES	.144	.039	.095	3.718	.000	.799	1.251
	保護者の学歴期待	.272	.028	.264	9.564	.000	.688	1.453
	偏差値	.050	.005	.287	10.718	.000	.730	1.370
	塾利用時間/週	.049	.012	.098	4.171	.000	.951	1.051

調整済みR2：モデル1 .238、モデル2 .296、モデル3 .306

従属変数：本人の学歴希望（中学校9、高校12、専門学校・各種学校14、短大・高専14、普通の大学と難関の大学16、大学院18、その他は欠損値）

独立変数：性別（男子1、女子0）、SES（親学歴と世帯年収の主成分分析のスコア）、保護者の学歴期待（本人の学歴希望同様にスコアを付けた）、偏差値（2019年度の5教科平均偏差値）

「普通の大学」への進学を志向している。

SES上位層の子どもほど、高校卒業後進学を希望する割合が大きく、「普通の大学」と「難関の大学」の希望率が高い。SES下位層の子どもほど、高校卒業後進学を希望しない割合が大きく、2年制の高等教育を希望する割合が大きい。保護者の学歴期待も大抵同じ傾向を示す。さらに偏差値をコントロールしてみた結果、本人の学歴希望と保護者の学歴期待は、偏差値最上位群ではさほどSESに左右されないが、偏差値最下位群ではSESと強く関連する。

親子ペアの回答を比較した結果、5割弱の親子が全く同じ選択肢にしたことがわかった。SES最上位層の一致率は高学歴に集中するのに対して、最下位層では「普通の大学」の一致率も比較的大きいが、低学歴志向の一致率がそれを上回る。

本人の学歴希望に対して、偏差値、保護者の学歴期待、塾での学習時間、SESおよび性別のいずれも有意な影響をおよぼす。偏差値の規定力は最も大きく、保護者の学歴期待はそれに次いで大きい。子の学歴希望に対する保護者の学歴期待の影響は学習塾の利用、SESよりも大きいという結果に留意する必要がある。(王傑)

〈注〉

- (1) 具体的なデータは中西・耳塚(2020)を参照してもらいたい。
- (2) 調査の都合で、B市データは小5と中2、全国データは小6と中3というズレはある。また、全国データはA問題とB問題の総計を用いた数値である。
- (3) パネルデータを用いた固定効果モデルによって同様の知見が中西(2017)によって示されている。
- (4) 分析モデルの適合度が低いため参考にとどめるが、「大きく低下」に関連する要因を検討するため、「大きく低下」群、「やや低下」群、「変化なし」群、「やや上昇」群、「大きく上昇」群の5カテゴリーを従属変数とする多項ロ

ジスティック回帰分析を行った結果が参考図3-1である。SESはもとの連続変量を、平日の学習時間は時間(分)に換算して分析に用いた。基準カテゴリーは「大きく低下」群である。

「大きく低下」群と比較して、「やや低下」群、「変化なし」群、「やや上昇」群、「大きく上昇」群の、いずれも、SES、平日の学習時間が有意であり、SESが高く、平日の学習時間が長いという結果であった。

〈付記〉本研究は、JSPS科学研究費補助金(18H00984(研究代表:耳塚寛明)、20K13911(研究代表:中西啓喜))の助成を受けた。

〈文献〉

- Lareau, A., 2003, *Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life*. University of California Press.
- 耳塚寛明、2006、「教育アスピレーションの規定要因」、『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究JELS第8集—Cエリア基礎年次調査報告』31-36頁。
- 耳塚寛明・中西啓喜、2021、「社会経済的背景別に見た学力に対する学習の効果」耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵編『学力格差への処方箋—[分析]全国学力・学習状況調査』勁草書房、pp.61-76。
- 中島ゆり、2006、「教育アスピレーションとジェンダー」『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究JELS第8集—Cエリア基礎年次調査報告』37-41頁。
- 中西啓喜、2017、『学力格差拡大の社会学的研究—小中学生への追跡的学力調査結果が示すもの』東信堂。
- 中西啓喜・耳塚寛明、2020、「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究(Japan Education Longitudinal Study: JELS)—JELS 第二期調査 初年次報告」『中央調査報』Vol.752、pp.6581-6587。

参考図 3-1 学力の変化を規定する要因についての検討

	やや低下			変化なし			やや上昇			大きく上昇		
	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)
切片	.840	.182		.709	.180		-.056	.201		-1.136	.258	
性別（基準：女子）												
男子	-.171	.172	.843	-.006	.169	.994	-.272	.190	.762	.069	.239	1.072
SES	.256	.088	1.292	.484	.087	1.623	.387	.097	1.472	.276	.122	1.318
平日の学習時間	.004	.002	1.004	.007	.002	1.007	.008	.002	1.008	.008	.002	1.008

垂見裕子、2021、「社会関係資本と学力格差—社会関係資本の関係性（つながり）と規範に着目して」、耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵編『学力格差への処方箋—[分析] 全国学力・学習状況調査』、勁草書房、pp.77-91.

王杰（傑）、2014、「中学3年生の学歴希望の中日比較—4エリアにおける親子ペア調査から—」『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究JELS 第17集 細分析論文集（5）』1-9頁、お茶の水女子大学JELS事務局発行。

王杰（傑）、2018、「保護者の学歴期待への接近—親子ペアの追跡調査から」JELS第19集 細分析論文集（7）』35-46頁、お茶の水女子大学JELS事務局発行。

王杰（傑）、2019、「親の学歴期待と子の学歴希望・教育達成—変化するなかでの関係性および階層差—」耳塚寛明・中西裕子・田中智子編著『平等の教育社会学』67-83頁、勁草書房。

山田哲也、2021、「家庭の社会経済的背景と学力」耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵編『学力格差への処方箋—[分析] 全国学力・学習状況調査』勁草書房、pp.11-37。

Japan Education Longitudinal Study: Phase II Survey Report

Hiroaki MIMIZUKA (Aoyama Gakuin University)

Hiroki NAKANISHI (St. Andrew's University)

Noriko KANIE (Utsunomiya Kyowa University)

Yuko TARUMI (Musashi University)

Jie WANG (Keio University)

The Japan Education Longitudinal Study (JELS) began conducting a survey in 2018 in local core cities with the aim of obtaining some findings that would contribute to improving the students' academic achievement gap. Specifically, two grades, namely the fourth grade elementary school and first grade middle school, were the targets of the first wave of the survey in 2018, and a panel survey is now being conducted to follow the students every year until they graduate from middle school. The survey consists of (1) a questionnaire survey for students, (2) a students' academic achievement survey, (3) a questionnaire survey for homeroom teachers, and (4) a questionnaire survey for parents. Thereafter, we will attempt to comprehensively grasp the process of educational inequality among students, to sociologically clarify the interactions between family background, cultural and economic environments, and teachers' pedagogy and teaching practices, while understanding ways to address inequality.

Keywords : Sociology of education, students' academic achievement gap, panel survey, JELS (Japan education longitudinal study)